No. 1400

特　集

中国残留孤児、祖国へ

中国東北地区、かっての満州にはおよそ220万人の日本人がいた。昭和20年8月、敗戦のさ中、親と離ればなれになったりせめて子供の命だけは助けて下さい。と中国人に預けられたりした日本人の子供が大勢いた。こうした子供たちを中国残留日本人孤児という。これらの孤児たちは今日、苦労を重ねながらも中国社会の中で立派に成長している。しかし、自分はいったい誰なのか知りたい、また自分の肉親と一度だけでも会いたいと願い続けてきた。
昭和47年、日本と中国は長かった不幸な関係に終止符を打ち、国交を回復、この時周恩来首相が、「日本人は日本に帰そう」と約束したことから孤児の肉親探しが始まった。肉親探しにまず立ちあがったのは、中国で自分の子供を失ったり、離ればなれになったり忘れ得ぬ体験を持つ主婦たちだった。

思い出したくない、触れられたくないという気持を押えて、孤児探しを討えた。一方、孤児探しに全生涯をかける山本慈昭さんのもとへは、
「私の肉親を探して下さい」という手紙が中国から続々と届けられ、多くの人が訪れて来た、新潟県に住む滝本コサキさんもその一人であった。しかし、長い歳月と言葉の壁にはばまれ孤児探しは思うように進まなかった。

こうした背景を受けて、戦後36年たって初めて、孤児47人が自分の目で肉親を探すため来日することになった。一行一人、顔淑琴さんは、「２週間という短い期間ですが、どんな事があっても肉親を探し出したい。何としても……、」宿舎となった東京・代々木の国立オリンピック記念センターで本格的な調査が進められた。面接調査では通訳を通すもどかしさを感じながらも、懸命に細い記憶の糸をたぐった。「別れる時、落花生をもらった」「母は口の所にホクロがあった」「父は額に傷跡があった」と。

この結果、何組かの劇的な親子、肉親との対面があった。〝もしや〟と思っていた部殿挙さんの名前を新聞で見た滝本さんは新潟から飛んで来た。しかし、係官の実情調査はすぐに終った似ていると思いながらも、これという「決め手」はなく、肉親とは認められないという判断がなされた。

肉親探しの舞台は、東京から京都、大阪へと移った。
ここでも更に、何組かが肉親の対面をした。しかし、やっと母親を見つけたものの、母親のある事情から公にできないケースも出た。

36年という長い長い歳月に比べ、わずか２週間というのは、余りにも短かい。気持の整理が何一つつかぬ間にやってきた別れ。
（スーパー・インポーズ）
中国東北地区（旧満州）には、こうした日本人孤児が今なお7000人〜10000人いるという。
しかし、その正確な数字は誰も知らない。